1970年前後の占領史研究とその周辺

天川 晃

開催日時：2015年3月18日　14:00～16:00
場所：国立国会図書館東京本館　本館4階憲政資料室
講師：天川 晃
横浜国立大学名誉教授。政治学者。
近著に『占領下の議会と官僚』『占領下の日本―国際環境と国内体制』（ともに現代史料出版、2014）

皆さん、こんにちは。天川でございます。

今日は、「1970年前後の占領史研究とその周辺」というようなことでお話をさせていただきます。どこまで皆さんの趣旨に沿うのか、あるいはお役に立つのかわかりませんが、若干、昔話をさせていただきたいと思います。

2冊の本

今年は戦後70年ということで、いろいろと戦後をふり返ったり、それをどういうふうに評価するかという議論もなされているわけです。今日、私がお話しするのは1970年前後のことですので、戦後でいえば25年頃ということになります。ずいぶん昔ですね。1976年に外務省が第1回の戦後外交記録を公開します。つまり、それ以前にはそんなものは無かったわけですね。それから1979年4月に国立国会図書館に現代政治史資料室が出来て、ここでGHQの資料を見られるようになりました。今、占領期のことを研究しようとすれば、この憲政資料室に来てGHQ資料を見るとか、外交史料館に行くのが常識だろうと思いますが、そういったものがまだなかった時代、というのが1970年頃ということになります。

ここに2冊の本を用意してもらいました。今日はこの2冊の本に関することを中心にお話ししたいと思います。1冊は日本学術振興会から1972年の8

月に出ました『日本占領文献目録』。[1] この目録の作成に私自身が関わったということで、それにまつわる話がひとつ。もう1冊の占領史研究会編『占領史研究会ニュース』[2] は、1972年11月に発足した占領史研究会が1992年に解散するまでの20年間のあいだに発行していたニューズレターを、1993年に柏書房が出版してくださった本です。この占領史研究会には私もかかわっておりましたので、その話もさせていただきます。

『日本占領文献目録』
坂本義和先生からの電話

さて、私はこれまで占領の研究を主にやってきたわけですが、そのきっかけとなったのが、この『日本占領文献目録』を作るのを手伝ったということなのです。当時私は東大法学部の助手をやっておりました。ある日、国際政治研究者の坂本義和先生から電話がかかってきまして、「占領に関する文献目録を作るのだけど、君、手伝ってくれるか」ということでした。1968年3月のことだったと思います。当時、私の直接の指導教官は行政学・政治学の辻清明先生で坂本先生は私の直接の先生ではなかったのですけれども、辻先生の了解も得てアルバイト的にお手伝いするということで引き受けたわけです。

日米共同プロジェクト

坂本先生にお話を伺ってみると、これはかなり大がかりなプロジェクトであるということがわかりました。正式名称は、日米共同研究「日本占領行政に関する資料の収集及び調査」というもので、元を遡れば池田勇人首相とケネディ大統領が日米で文化交流をやるという合意をした枠組みに沿って始まったということのようでした。アメリカ側では当時ミシガン大学にいた日本政治研究者のロバート・ウォード（Robert Edward Ward）。日本側では当時成蹊大学の先生だった鵜飼信成先生。鵜飼先生は憲法学が専門で東大の社会科学研究所（社研）にもおられたこともあり、その後でICU（国際基督教大学）の学長もされた方です。このふたりをキャップとして、それぞれ両国でプロジェクトが始まったわけです。その日本側の受け皿が日本学術振興会でした。

それで、このプロジェクトの構造が私にもだんだんわかってきたのです

1）日本学術振興会編『日本占領文献目録』日本学術振興会，1972.
2）占領史研究会編『占領史研究会ニュース』柏書房，1993.

が、日本側の上のほうには偉い先生方が並んでいる専門委員会というのがありました。鵜飼先生をトップとしていくつかの班に分かれていて、一般班には、例えば、大河内一男東大総長や外務省関係で元駐米大使の朝海浩一郎氏とか、政治関係では辻清明先生、経済でいえば大来佐武郎、都留重人という大先生が並んでいます。トップの偉い先生方には我々はあまり縁がないのですけれども、そういった方々が大所高所から話をしておられたのでしょう。その下に実際にいろいろ目録作りを指揮するというような感じで坂本先生とか経済の中村隆英先生、憲法では芦部信喜先生といった若手の教授クラスの人がいたのですね。そのもう1つ下に、大学院・助手クラスの私どもが兵隊として実際の作業に携わるということでいたわけです。

カードを作り、annotationをつける

そうした3層構造のもと、班に分かれて文献を拾うという仕組みでやっていたのです。最初はまず文献を拾うカード—予備カードと呼んでいました—を作る、全般的にこの時期（占領期）に関係がありそうな事項のカードを作り、それを各班に分けて各班で必要な文献を選別してもらって、それを文献目録にまとめていこう、ということだったと思います。

私が入ったときには既にカード作りは始まっていました。その作業は東大の社研でやっていまして、社研で数人の女性たちを使って、小さな図書カードに情報を採っていました。その作業の元締めだったのが伊藤隆さん（政治史学者）と松沢哲成さん（政治史学者）。当時松沢さんは社研の助手でした。私はそこに入るような感じで動くこととなったのですが、伊藤さんとは初めてそこでお目にかかりました。

われわれが『全日本出版物総目録』とか『納本週報』、『雑誌記事索引』などをいろいろと見て、タイトルをチェックする、それを女性たちがカードに転記していく、そういう作業がスタートしていました。私は「カードなんてたくさん採れるだろう、1日に300枚はできるはず」と思っていたのですが、とんでもない（笑）。100枚採るのがせいぜいでした。もうひとつ作業に関して言えば、この文献目録はただ文献のリストを並べるだけではなく、主要な文献にはアノテーションをつける、つまり、注記をつけるということをやりました。私、「annotation」という単語をよく知らなかったんですね。坂本先生が「アノテーション」と言われるから、「アノテーションって何なのかな？」と後で辞書を引いた記憶があります。これは要するに、文献目録を作るのだけど文献のタイトルだけ並べるのではなく、現物を見てチェックし

ないとダメということですよね。現物を探すのにけっこう苦労しましたが、丁寧に見るか雑に見るかは別にして、現物を見たということが、言うなれば先行研究の調査をやったというような感じになり、そのあと私が占領期を研究する背景になったというわけです。

編集の手伝い―文献調査に東奔西走

実際にそこで私が何をやっていたかというと、まず統治機構・政治班で政治関係の文献のリストを作ったりまとめたりを二年くらいやったところで、今度は各班からそれぞれリストを集めて1冊の本に編集しなきゃいけないということになりました。編集者を誰がやるかということになって、どこで決まったかわかりませんが、坂本先生のところでやることになったのですね。坂本先生のところでやるということは、事実上、かなりの部分を私がやらざるをえない、こういう話なんですね（笑）。それで編集助手みたいなことをやることになりました。

それで、各班に分かれて作業をしたリストが出てきたのですが、これがまあ率直に言って、バラつきがひどいんです。例えば、経済班は中村隆英先生とか原朗さん（経済学者）とかがやっておられて、ガッチリしたほとんど完璧と言っていいようなものでした。けれども、そうでない班のものもある。特に困ったのが宗教でした。多分、作業をやっていた人は神社関係の人なんでしょうね。神社本庁の新聞とかニュースといったものは細かく拾ってあるけれども、キリスト教だとか仏教関係とかは拾ってないんですよ（笑）。いくらなんでも戦後の問題で言えば、新興宗教のもあるだろうし、キリスト教のことも書かないわけにはいかないだろうと思うのだけれどほとんど何も拾ってない。ちょっとこれはマズイよというので小口偉一先生という宗教学の先生のところへ行ったり、キリスト教関係の人のところに行ったりして文献を教えてもらいました。

それから一般班（分野）のところでは婦人問題が不十分でした。今なら女性問題というのでしょうか。これも項目はあるけれどあんまり拾ってない。坂本先生からは、「ちょっと婦選会館でも行って調べてきてくれ」とか、女性史の研究者で、もろさわようこ（両沢葉子）という方がいましたけど、「あそこに行って話を聞いてきてくれ」と言われたりしました。もろさわさんからは、「婦人会史や新聞を調べたり、インタビューするなど自分で『現場』を確かめることだ」、と説教されましたが、私は自分で何かを調べて研究をしてるのでなく、単に文献の補充をしているだけだったので、バツが悪

い思いをしました。その他、引揚問題関係で日本赤十字社にいったこともありました。

その他にも沖縄の問題も拾ってないとか、いろいろ不足が目につくんですよね。それで、要するに、各班のリストのデコボコをできるだけ平らにするために、私自身が、情報を採りにあちこち関係先を走り回りました。考えてみれば、当時68年、69年というのは大学紛争の時代なんですね。ですから、大学の中で落ち着いて地味な作業をやっておられなかったようなこともあったのじゃないかと思いますし、坂本先生自身も、68年半ばの大河内一男総長辞任のあと加藤一郎総長代行の補佐役をやることになると、そっちに時間を取られてしまう。私はその下でいろいろやっていると、坂本先生から「あっち行け、こっち行け」と指示が出る（笑）。最終的に、私も相当この文献目録に手をかけてやらざるを得なかったということであります。

公文書未公開の時代

先ほど申しましたように、当時、公文書というのはまだほとんど公開されていないわけであります。ただ、東京大学の占領体制研究会に公文書が少しあったので、そういうものは目録に拾いました。外交史料館は、文書の公開をまだきちっとはやっていなかったのですが、一部、GHQ関係の「来往信綴」とか「ポツダム宣言関係」というのは見せていたのですね。それらは、私も外交史料館に出かけて調べたことがあります。

このプロジェクトには、何しろ朝海さんが入っておられたので、外務省の記録が保管してある書庫の所蔵リストみたいなものが手に入ったんですね。ですから、現実には見せることはできないけれどもこういうものがファイルとしてありますよ、というような情報は載せてあります。閲覧不可でもリストアップしておけば、いつかは役に立つだろうという趣旨です。例えば、天皇とマッカーサーが会談をしたというファイルがあるというのは、この目録には書いてあります。外務省がそういうことを発表しているかどうか知りませんが、その「朝海リスト」にはあったものですから、それを書いておくというようなことだけはしました。外務省調書のリストというものも手に入ったので小さくではありますが、目録に拾っておきました。

そのほかには自治大学校の資料を見に行ったりしました。目録の巻末には、経済安定本部、農林省、人事院の資料のリストもついております。実際に見ることができる、できないと、いろいろ問題はあるにせよ、リストだけは入手できたので載せました。安本（経済安定本部）のリストは中村先生の

筋から入手できたのだったと思います。農林省はどうだったかわかりませんが、人事院は辻先生の筋だったのかもしれません。やっぱり、有力な先生方の筋があっていろいろと動いたので公文書関係の情報収集が可能になったというようなことだろうと思います。

国立国会図書館でも調査

そして、国会図書館でも調査をしました。そのころ法律政治課という部屋がありまして、三谷弘さんという背の高い課長さんがおられて、いろいろと教えていただきました。熊田淳美さんや住谷雄幸さんにもお世話になりましたが、そのころお二人の所属がどこだったか、ちょっと覚えておりませんが、資料を見せていただいたりしました。

当時、2階だったと記憶しますが「幣原平和文庫」があって、暗い部屋の中に高橋良夫さんというおじさんがヌシのようにドカッと座っていました。何度か行っているうちにお茶を出してくださったりして、最後には『幣原喜重郎』の本を1冊いただきました。図書館の本を勝手に持ち出したわけではないことを証明するために「これはこのひとにあげたのだ」という一筆をわざわざ書いてくださって（笑）。普通版は青い装幀本なのですが、私は金色の特別版をいただきました。あれはどこにやったか、今探すのはちょっと大変なんですが。

幣原平和文庫には、幣原内閣期の公文書の綴が何冊かあったんです。ところがそれは全部が公開されていたわけではなかった。憲法とかに関するそういった非公開の資料の綴は、三谷課長のところにあったんですね。それを三谷さんは見せてくださいましたので公開・非公開の別なく細かいリストは作ったのですが、それをそのまま載せるわけにはいかないと言われました。幣原内閣の文書の中には非公開のものがいくつかあったということはよく覚えております。[3)]

それともうひとつ、三谷さんの案内で憲政資料室の書庫の奥の方に外務省関係の資料があるんですよと教えてもらって、これは坂本先生と一緒に来た時に見せてもらいました。それが芳賀四郎文書だったのかどうか、ちょっとわかりませんが。「じゃあ、これも資料のタイトルだけでも載せるわけにはいきませんか？」と訊いたのですが、反応はやっぱり渋かったですね。「い

3）現在では「幣原喜重郎関係文書（幣原平和文庫）」として憲政資料室で全て公開されている。

やあ、寄託元との関係もあるから…」云々と言われて。だから国会図書館にそういうものがあることは書いておりません。書いて、あとで叱られると困ると（笑）。このあとも長い付き合いもあるかもしれないと思ってですね。[4)]

ついでに申しますと、当時まだ世間には出ていなかったのですが、朝海さんが対日理事会を傍聴しに行って書き送っておられたレポートが外務省にありまして、当時外務省はもちろん公開していなかったけれど、こういうものがあるよ、とコピーを委員会に出してくださったんですね。そしてそういうものが東大法学部にあるということを目録に書いたところ、目録が出版されてからですけれども、外交史料館の戸川さんという女性から電話がかかってきまして、「あれは、困ります」と抗議がきました。でも、東大法学部と書いておいても、あそこはほとんど一般人には公開しないも同然のところですからとかナントカ言ってしのぎました（笑）。ともかく、国会図書館だけでなく外務省もまだガードが固い、そんな時代だったのです。この「朝海レポート」はのちに外交記録として公開され、国会図書館にもおられた三沢潤生（みさわしげお）さんの編で『初期対日占領政策』[5)] として毎日新聞社から出版されました。

月報の書評で酷評

こうやっていろいろと苦労したわけですが、この『日本占領関係文献目録』が1972年の8月に出版されました。一方、アメリカのほうの目録は1974年にウォード（R.E. Ward）とシュルマン（F.J. Shulman）の編による“*The Allied Occupation of Japan, 1945-1952: An Annotated Bibliography of Western-Language Materials*.”[6)] というのが出ました。それを見て、「あぁ、目録づくりのレベルがずいぶん違うな」というようなことをまさに実感したわけであります。

そうしますと、国会図書館の住谷さんと熊田さんのお二人による書評、「日米二つの『日本占領文献目録』―紹介と比較」というのが、『国立国会図

4）現在では「芳賀四郎関係文書」として憲政資料室で全て公開されている

5）朝海浩一郎『初期対日占領政策』上・下，毎日新聞社，1978−1979.

6）Robert E. Ward and Frank J. Shulman, *The Allied Occupation of Japan, 1945-1952: An Annotated Bibliography of Western-Language Materials*, Chicago: American Library Association, 1974.

書館月報』（第161号 1974年8月発行）[7] に出たわけです。この『月報』は、私が国会図書館に来た時に三谷さんからいただいた記憶があります。

その書評には、アメリカのものはやっぱりすごい、詳細な文献解題に特徴の第一がある、読むに堪える文献目録である、今後の解題つきの書誌のあり方を検討する上で非常に役に立つ、と書いてある。一方、日本版のほうについては酷評されましてですね（笑）。ともかく、第一に、「学問的な価値をもつ文献目録であるのだから、アメリカ版のように分野ごとに解説をつけるべきである」、おっしゃるとおりであります。第二に、「文書類に対する記述の不十分さが目につく」、まあそのとおりです。「日本版では幣原文庫の憲法関係については僅かの記述があるだけで、その内容は明らかにされていない」。私から言えば、国会図書館が見せ渋ってるのでしょ、と三谷さんに言いたかったけれども、まあ、そのとおりです。そして、第三に、「基本的な図書で採録されていないものが分野によっては目につく、例えばビュートーの『終戦外史』[8] はないし、当館（国会図書館）刊行の『議会政治文献目録』[9] や『日本国憲法制定経過日録』[10] は利用価値が高いものであるが、両者とも採録されていないのはどうしてだ」、とこう書いてありまして（笑）、これまたおっしゃるとおり。

日米の差

ともかく、それはやっぱりおっしゃるとおりでありまして、日本版のほうは、私などを含めてビブリオグラフィ（目録）なんて作ったこともない人間がかき集められて、アルバイトみたいにやっているわけですね。一方、むこうのアメリカ版の編集者のシュルマンなんていうのは、プロフェッショナル・ビブリオグラファーとかなんとかっていって、専一それをやっている人なので、その違いは歴然としていました。

もうひとつ感じたのは、当時、パソコンとかそんなものはないわけです。でも、アメリカのものはコンピュータのようなものを使って編集しているな

7）住谷雄幸・熊田淳美「日米二つの「日本占領文献目録」―紹介と比較『国立国会図書館月報』161号1974.8, pp16−18

8）ロバート・J.C.ビュートー著；大井篤訳『終戦外史』時事通信社，1958.

9）国立国会図書館議会開設七十年記念展示会事務局 編『議会政治文献目録』国立国会図書館，1961.

10）『日本国憲法制定経過日録』憲法擁護国民連合理論研究委員会，1954.

と実感しました。日本では手で書いてやっているわけです。アメリカ版にはふたつ索引があります。文献の著者の索引と、もうひとつは占領軍の関係者の索引というのがあります。索引というものは、カードを繰っていってではなかなかできるものじゃないのです。本当は、日本版にも索引は欲しいとは思っていたのですが、そんなものをやるとなると、それだけでまた人手と時間とが必要になるということで、出来ませんでした。もし索引があってチェックが出来れば、ビュートーの著作を落としていることにも気づいたと思いますが。ともかくそういうことでございました。

そして占領研究へ

これだけコンピュータが発達した今、文献目録を作るとすれば、国会図書館が非常にうまくできるのかどうか（笑）。それから、日本ではアノテーション付きの目録というのは、それまであまりなかったんじゃないかと思います。またその後あるのかどうかわかりません。これは結果においては不十分な文献解題ではあったんですが、自分としてはそれを作成するために実際にいろいろと文献資料を見たことはずいぶん勉強になりました。

これが『日本占領文献目録』にまつわる話で、そういうようなことをやっているうちに、結局私も深みにはまっていったと言いますか、やらざるを得なくなったと言いますか、せっかくここまでやったんだから少し占領の研究をしようかと思ったわけであります。

1970年前後ーふりかえる時期

さて、ここで、当時の時代背景についてお話ししておきたいと思います。

1965年というのは戦後20年で、今と同様、「戦後二十年の節目」というようなことが言われた頃です。また1968年というのは明治百年なんですね。当時、「戦後二十年か明治百年か」、そういう議論をしている人がいました。一方は、明治百年の日本の成果を問うというような、ある意味でナショナリズムの復活的な意味合いをもつようなニュアンス。もう一方の、戦後二十年というのは、デモクラシー、民主主義が入ってきた戦後の価値を擁護しなくてはならないという動き。当時ベストセラーになった『危険な思想家』[11] という本がありましたが、その副題が「戦後二十年か明治百年か」でありました。

11）山田宗睦『危険な思想家』光文社，1965.

また、ちょうどこのころになると、坂本先生なんかは一種の理想主義者だと言われ、高坂正堯さん（政治学者）とかの現実主義者と言われる論調も出てきて、「戦後二十年か明治百年か」という議論の中にはいわば保守と革新の対立的な動きみたいなものもあったのではないかというふうに思います。

保守と革新というようなことで言うと、中央政府は佐藤栄作さんが首相で保守でありますが、自治体レベルでは「革新自治体」というのがけっこういろんなところに出来ていて、中央と地方の対立みたいなものも出てきていたわけです。他方で1968年頃、大学紛争が始まって、ここでは新左翼と言いますか、そういう動きも出てきて、ただ単に「保守対革新」だけではないいろんなものが展開してくるようになってきます。文化大革命もそのころ中国で始まっておりますし、それからフランスの学生運動だとか、アメリカのベトナム反戦運動みたいなこともあったわけで、また日本でも1970年に日米安保条約が延長されるということで「70年安保」とか、保革あるいはそれにとどまらないいろんな動きが出てきていた時代であります。

他方で、70年代は公害だとか福祉関係だとかいうようなことがイシューになるような時期でもあったわけです。それからふたつのニクソン・ショック。米中接近でニクソンが訪中する、ドルの金兌換停止。そして、沖縄が還ってくる。その後、佐藤さんが辞めると福田赳夫さんじゃなくて田中角栄が総理大臣になるというようなことで、戦後のいろんな、それなりの秩序と思われていたものが、国際的あるいは国内的に揺らいでいるような感じを持つ時期だったと思います。そういうことから、戦後の出発の時期に対する問いかけのようなものも、なされていくようなことだったのではないかと思います。

これが一般的な時代背景でありますが、当時の占領期の研究状況について少し見ておきましょう。

占領研究の始まり

占領期に対する関心の最初のピークというのは、これは言うまでもなく講和直後くらいの頃、いわゆる「内幕」ものが外国語で出て、その翻訳が相次いで出版されました。マーク・ゲインの『ニッポン日記』[12] は非常に早かっ

12）マーク・ゲイン著；井本威夫 訳『ニッポン日記』（上・下）筑摩書房，1951.

たと思います。それからテクスターの『日本における失敗』[13] やワイルズの『東京旋風』[14]。『日本の新憲法』[15] ―『Political Reorientation of Japan』[16] の一部翻訳ですね―は憲法の制定過程にかかわるアメリカ側の動きについて書いたもので、今の憲法がどうやって作られたのかという話が出てくるわけです。

そうしたものだけじゃなくて、日本人による回想のようなものもいくつか出てまいります。住本利男の、毎日新聞社から出た『占領秘録』[17] はいろんな人からのインタビューがあります。『戦後日本の政治過程』[18] は、最初、日本政治学会の年報の形で1953年に出て、これを改訂したものが岡義武先生の編で『現代日本の政治過程』[19] というかたちで岩波書店から出ています。これが学問的なもので比較的早かったのではないかと思います。それから矢内原忠雄先生の編集の『戦後日本小史』[20]、これは政治だけじゃなくていろんな分野を概観したものが1958年ぐらいに出る。内幕ものがあり、回想みたいなものがありで、そうしたもので占領期を位置づけようというのが50年代になって出て来たということであります。

他方、戦後20年になる1965年頃、昭和40年頃になると、回想記ふうなものもたくさん出て来るし、あるいは資料的なものも少し集められるようになりました。『語りつぐ戦後史』[21] とか、『証言 私の昭和史』[22] というのは当時

13）ロバート・B.テクスター 著；下島連 訳『日本における失敗』文芸春秋新社，1952.

14）H.E.ワイルズ著；井上勇 訳『東京旋風』時事通信社，1954.

15）連合国最高司令部民政局編；小島和司，久保田きぬ，芦部信喜訳『日本の新憲法』憲法調査会事務局，1956.

16）*Political Reorientation of Japan, September 1945 to September 1948 : Report of Government Section, Supreme Commander for the Allied Powers*, Washington, D.C. Government Printing Office, 1949.

17）住本利男編『占領秘録』（上・下）毎日新聞社，1952.

18）日本政治学会編『 戦後日本の政治過程』岩波書店，1953.

19）岡義武編『現代日本の政治過程』岩波書店，1958.

20）矢内原忠雄編『戦後日本小史』（上・下）東京大学出版会，1958−1960.

21）鶴見俊輔編『語りつぐ戦後史』（第1−第3），思想の科学社，1969−1970.

22）東京12チャンネル報道部編『証言私の昭和史』（第6（混乱から成長へ））学芸書林，1969.他

の東京12チャンネル（現在のテレビ東京）で三国一朗がやっていた番組を元に本にしたものですね。『現代史を創る人びと』[23] は中村隆英先生と伊藤隆さんと原朗さんがいろんな人にインタビューしたもので、何冊か出ていますね。それから安藤良雄さん（編）の『昭和経済史への証言』[24] などが60年代後半から70年代初めぐらいに出てまいります。ほかに渡辺武さんの『占領下の日本財政覚え書』[25] が1966年、1969年に松浦総三さんの『占領下の言論弾圧』[26] は個人の回想的なものとして出ています。

それから政府関係ということでは『戦後自治史』[27] が自治大学校によって比較的早く出て、1960年に第一巻が出て、以後毎年出ていますし、憲法調査会の報告書、その間、憲法について言えば、佐藤達夫さんの『ジュリスト』の連載[28] が1955年から始まり、1964年頃に『日本国憲法成立史Ⅰ・Ⅱ』[29]、ラウエル文書が『日本国憲法制定の過程』[30] として1972年に出ています。資料集として各分野のいろんなものをいれた『資料戦後二十年史』[31] が1966年から出ています。少しまとまったようなものが60年代の半ばになると出かかっていた、ということではないかと思います。

共同研究が活発に

そういうものが出版されるなかで、60年代後半から、いくつかの占領の研究プロジェクトが始まったのではないかと思います。その一番の先駆けというべきものが『思想の科学』だと思います。1966年に『思想の科学』で「占領と追放」[32] という特集をした後に、「占領研究サークル」が発足したようであります。その中心になったのが佃實夫さん。佃さんは図書館関係の方で、私などは、佃さんの著書の『文献探索学入門』[33] を非常に愛用させてい

23）中村隆英・伊藤隆・原朗編『現代史を創る人びと』（1-4）毎日新聞社，1971-1972.
24）安藤良雄編著『昭和経済史への証言』（上-下）毎日新聞社，1965-1966.
25）渡辺武『占領下の日本財政覚え書』日本経済新聞社，1966.
26）松浦総三『占領下の言論弾圧』現代ジャーナリズム出版会，1969.
27）『戦後自治史』（1-14）自治大学校，1960-1978.
28）佐藤達夫「日本国憲法成立史」『ジュリスト』（81)-(148）1955.5-1958.2.
29）佐藤達夫『日本国憲法成立史』（第1巻-第4巻）有斐閣，1962-1994.
30）高柳賢三・大友一郎・田中英夫編著『日本国憲法制定の過程』有斐閣，1972.
31）『資料・戦後二十年史』（第1-第6）日本評論社，1966-1967.
32）「特集・占領と追放」『思想の科学』（53）1966.8，pp.2-58
33）佃實夫『文献探索学入門』思想の科学社，1969.

ただいたものです。この占領研究サークルの成果が1972年に『共同研究 日本占領』[34]というので出ました。その後もこのグループは続いて、『共同研究 日本占領軍』[35]が1978年に出るわけであります。これがやっぱり一番大きな、この時期のいろんな人を集めてやっていたグループではないかと思います。私は最初の本では直接関わりがなかったのですが、二度目の共同研究の際には、「おまえも書け」ということでおつきあいさせていただいて、佃さんとも面識をもったわけであります。

もうひとつのプロジェクトが東大社研の「戦後改革」[36]というので、これは1969年から始まっております。これは本として1974年から1975年にかけて全8巻で出て、私は政治過程の巻で（東京大学社会科学研究所編『戦後改革 3 政治過程』）「地方自治制度の改革」を書かせていただきました。

それから大蔵省の財政史の「終戦から講和まで」[37]というのが1971年から始まったようでありますが、秦郁彦さんの本（大蔵省財政史室編『昭和財政史－終戦から講和まで－アメリカの対日占領政策』）が出たのが1976年でした。このように見てくると、60年代の終わり頃から70年代初めぐらいにかけての時期により占領に特化した共同研究のようなものが始まりかかっていたのかなというふうに思うわけです。

あともうひとつ、国際政治学会などで「国際環境」というプロジェクトがありましたね。細谷千博先生だとか、永井陽之助さんだとか、入江昭さんだとかがやられて、五百旗頭真さんが大きな本2冊（『米国の日本占領政策：戦後日本の設計図』上下[38]）を書いたあのシリーズですね。あれは冷戦史というのか、占領期というのではないかもわかりませんが、こういうかなり大きなプロジェクトが国際政治学会の人を中心に動いていたというふうに思います。私はときどき、「（こういうことをやるので）出て来ないか？」と言われて研究会に出たことはありますが、メインのメンバーではありませんでした。

34）思想の科学研究会編『日本占領』徳間書店，1972.
35）思想の科学研究会編『日本占領軍その光と影』（上巻・下巻）現代史出版会，1978.
36）東京大学社会科学研究所編『戦後改革』（1−8）東京大学出版会，1974−1975.
37）大蔵省財政史室編『昭和財政史』（第1巻−第20巻）東洋経済新報社，1971−1983.
38）五百旗頭真『米国の日本占領政策』（上・下）中央公論社，1985.

アメリカでも

そして、アメリカのほうを見ますと、占領（行政）の経験者による博士論文による研究というようなものがいくつも出ていたようですね。たとえば、ハンス・ベアワルドの『指導者追放』[39] はその例です。その他に翻訳はされていないけれども“*The Occupation of Japan: A Study in Organization and Administration*”[40] や“*The Military Occupation of Japan: The First Years of Planning, Policy Formulation, and Reforms*”[41] などは研究する上でも重要なものでした。

それと、マッカーサー記念館（米国ヴァージニア州ノーフォーク）のシンポジウムというのが1975年から1991年まで何回か開かれて、向こうでもそういうものを始めるような動きがあったということです。このシンポジウムには袖井林二郎さんがほぼ皆勤だったと思います。

日米共同研究

先ほど言いましたように、日米共同の文献目録を作るという作業も1968年から始まっていたわけですし、アメリカのほうの本が出たのが1974年でありまして、そのあと1975年から共同研究をやろうということで、今度は、研究をするというプロジェクトがアメリカと日本で始まったわけです。このときは、アメリカのチームはウォードさんがキャップで日本側は坂本先生で、主に政治、憲法関係の研究者が中心になり、1975年から3年ぐらいやりました。しかし、本（坂本義和・ウォード『日本占領の研究』[42]）が完成するのは1987年で、かなり時間がかかりました。

アメリカ側の参加者のウォードさんは占領には直接関わらなかったようですが、占領当時にミシガン大学が岡山に研究センターを1950年ごろから置いていたようで、その関係でウォードさんは日本に来ていたようです。シュ

39）H.ベアワルド著；袖井林二郎訳『指導者追放』勁草書房，1970.

40）Ralph J. D. Braibanti, *The Occupation of Japan: A Study in Organization and Administration*, 1949, Syracuse University

41）Eric H. F. Svensson, *The Military Occupation of Japan: The First Years of Planning, Policy Formulation, and Reforms*, 1966, University of Denver

42）坂本義和, R.E.ウォード 編．『日本占領の研究』．東京大学出版会, 1987.2.
英語版は Robert E. Ward, Sakamoto Yoshikazu eds. *Democratizing Japan : The Allied Occupation*, University of Hawaii Press, 1987.

タイナーはオーストリア出身の学者でGS（Government Section, 民政局）にいまして民法改正なんかに関わっていて、後に“*Local Government in Japan*”[43]という本を書いた人でスタンフォード大学の先生です。マクネリーは占領中にはG2（参謀第二部）にいたようですが、帰国してからはメリーランド大学の先生で憲法の制定過程を研究していた人です。そしてベアワルドはGS（民政局）で公職追放を担当していた人ですが、のちにUCLAの政治学の先生となって袖井林二郎さんの先生になります。この人たちがアメリカ側のチームに入っていたわけで、あと二人、スーザン・ファーとT.J.ペンペルという人が入っていました。この人たちはぐっと若くて、「占領関係のおじいさんたちと若い二人」というそういう感じのメンバーでやったわけです。

占領史研究会
竹前さんと福島さん、『占領史研究会ニュース』

最後に占領史研究会の話を少しさせていただきます。実は占領史研究会というのは1972年の11月に発足したわけでありまして、これは端的に言えば、私が竹前栄治さん（政治学者）と 福島鋳郎さん（出版史研究家）に連絡をして、「研究会をやろうじゃないの」という話になって発足したということであります。

何をやろうとしたのかというと、まず、『日本占領文献目録』がともかくひどいものなので、これは熊田さんや住谷さんの書評が出る前から私もわかっておりましたが、その補訂をしなければならないということは考えておりました。そうだとすれば、ある程度私は全体をみていたわけですが、ひとつは占領期の資料の事情に詳しい竹前さんを捕まえる必要があるだろうと。竹前さんは1970年に『アメリカ対日労働政策の研究』[44]という本を出されて、アメリカの資料を使ってこういう研究が出来るんだということを示してくださった、いわばパイオニアですよね。それから思想の科学にも、東大社研にも、大蔵省にも関係のある全部のプロジェクトに首を突っ込んでおられたので、そうすると彼自身がパイオニアであると同時に、竹前さんを通じてそういうところの動きも全部わかるだろうと期待した、こういう話であります。

43）Kurt Steiner, *Local Government in Japan*, Stanford University Press, 1965.
44）竹前栄治『アメリカ対日労働政策の研究』日本評論社，1970.

もうひとり福島さんという方は、大学とかの研究機関の学者でもなんでもないコレクターの方でありますけども、戦後の雑誌とか新聞だとか、そういうものを非常によく持ってらっしゃる方でした。この方が、たまたま1972年8月、目録が出たのと同じ時期に、『戦後雑誌発掘：焦土時代の精神』[45]という本を出されました。これは戦後すぐ出た雑誌の創刊号を集めて、その目次と巻頭言を集めたもので、それに福島さんの解説がついているというものです。福島さんのこの本はこの年の毎日出版文化賞を受賞されました。要するに、彼はぜんぶ現物を持ってるんです。実際に資料を持っている人を捕まえておこうというのが、もう一つの狙いでありました。

実はこの『日本占領文献目録』の後ろにも雑誌のリストみたいなものは載っております。これの作成は東大の新聞研究所（新聞研）でやってもらって、また、フランク・シュルマンを通じて米国メリーランド大学のマッケルディン・ライブラリーにある、今のプランゲ文庫、プランゲ・コレクションの資料で雑誌のタイトルを補正したりして作ったんです。つまり、東大の新聞研には戦後すぐの雑誌の現物がないんです。だから、やっぱり現物を持っている人は決定的に強いなと思って、この人を捕まえようとしたのです。[46]

私はこの本を見る以前から福島さんの名前は知っていました。『日本占領文献目録』を作る際に見ていた『日本古書通信』とかそういうものに書いてらっしゃって、こりゃ頑固なジイサンかなと思っていたのです。こんなに古い雑誌をもっているのだから、こんな人とは話したいけれどつき合い辛いだろうなあと思っていたんです。けれども、本の奥付を見ると1937年生まれと書いてある。なんだ、俺と近い（年齢）じゃないかと。

そういうこともあって急いで手紙を書いて、「私はこういうことをやっているのですが、いろいろ話しをしませんか」ということで何回か会いまして、それから竹前さんに紹介して、「まぁ一度会って見て、研究会のようなことをやりましょうや」ということで話が合ったわけです。ちょうど（11月3日の）文化の日に、3人で御茶ノ水の喫茶店で会いました。会ったすぐそのあとで、おたがいにそんなによく知っているわけではないので、議事録の確認じゃないけども、その時のことを記録にしました。それにあと、いずれ目録を補訂しなきゃならんと思っているもんですから、気のついた新聞記

45）福島鋳郎編著『戦後雑誌発掘』日本エディタースクール出版部，1972.

46）現在、プランゲ・コレクションはメリーランド大学図書館ホーンベイク・ライブラリーにある。

事だとかの文献を書いて、それを「ニュースNo.1」として作っておふたりに送ったんですね。それが『占領史研究会ニュース』発行の発端です。何号続くか、なんてことは考えずにスタートいたしました。

70年代の研究会の活動―科研費などを資金源にして

そういうことでスタートしたわけですが、最初は3人で集まっていろいろ情報交換をやっていたのですが、やっぱり基本的な資料を集めよう、それぞれ関心は違うけれども、そういう情報を共有しようじゃないかということで、「SCAPIN」のリストを作ろうということになりました。当時は、「SCAPIN（SCAP Index Number），対日指令集」なんてどこにあるのかわからない。竹前さんがアメリカ大使館にあると言うので、とりあえず大使館に行きました。その前に、私は国会図書館で三谷さんに見せていただいて、ここに「SCAPIN」[47]があったことを覚えていたんですが、それを見せてくれって言ったら、また叱られるかなあと思って（笑）。

それで大使館に行ってコピーを取ることになったんですが、そんなことをやろうとすればお金がかかるわけですよね。大使館に行くお金ぐらいはいいわけだけれども、コピーを取ってとかいうと、じゃあお金をどうするかって、お金はない。

そこで朝日学術奨励金というのが麗々しく出ていたので、応募しようということになったんです。実は73年も応募したんですが、ダメでした。3人で占領のことをやるなんてちょっと無謀かなと思って、そこでちょっとメンバーを増やして、原朗さんと、依田精一さんと、手塚和彰さんと、農業経済をやっている若い岩本純明さんと7人にして1974年に応募したら、見事、奨励金100万円がとれたんですね。非常に良かったのでありますが、それはお金ができたということだけじゃなくて、新聞の記事で麗々しく出たので、こういうことをやっている奴がいるんだということも認められたんじゃないかと思います。

ところが、実はそのとき科研費（科学研究費助成事業）の申請を原朗さんが中村隆英先生をキャップにして占領期の経済政策の研究として出しておられて、1974年にそれもとれたんですね。ですから一挙にお金が出来たということになって。基礎資料の整備として、SCAPINの目録を作るとか、新聞

47）連合国最高司令官から日本政府に対して出された指令。現在、「国立国会図書館デジタルコレクション」ですべてインターネット公開されている。

記事の索引を作るとか、あるいは地方の文献はどうだろうと探してみたり、そういうことを占領史研究会はやる。占領期の経済政策研究会は、いろいろな研究報告を聴く、というかたちでやっていました。この科研費のほうには伊藤隆さんだとか、佐藤誠三郎さん（政治学者）、あとアメリカ史の五十嵐武士（政治学者）さんとか三和良一（経済学者）さんは経済の方ですが、そういった方も入ってこられて少し拡大しました。

これが3年で終わったんですが、今度は竹前さんをキャップにしてもう一回、科研費に応募しようというというのが「日本占領と地方政治」で、これを東京経済大学でやることにしたわけです。これには東経大のいろんな人、憲法の古川純さんとか、マスメディア論をやっている田村紀雄さんとかが参加されていました。

ですから70年代は主に科研費の研究会を中心に動いていたかんじだと思います。そのころの成果物といいますと、『地方における占領史関係文献目録』[48] です。これは、最初の朝日学術奨励金でやったもので、いろんな地方の図書館に照会を出して、「おたくに占領関係の書類（資料）はどういうものがありますか」と訊いてまとめたものですね。これは福島鋳郎さんがかなり精力的にやってくださいました。事務局の所在地が原朗さんのいた東京大学経済学部ということで回答してくださったというようなかんじで、いろいろと情報が集まりました。これが、「占領史研究資料（1）」となっていますが、それ以後出ていないのですけれども（笑）。それはともかく、研究資料の共有をやろうとしていたということがここに現れていると思います。これは国会図書館にもあるようですし、お礼の意味で送ってますから、地方の図書館にも入っていると思います。いまどきこんなものを見る人はいないと思いますけれども。

中村先生がキャップの科研費のほうの研究成果は本になりまして、東大出版会から79年に中村隆英編『占領期日本の経済と政治』[49] として出ています。ここに確か福島さんも何か書いていたと思いますが、「なんで（畑違いの）福島さんが入ってるんだ？」と思うかもしれませんが、それは（占領史研究会と）合体してやっていたということです。竹前さんの科研費のほうの成果は、これは科研費自体の報告書ですが、「日本占領と地方政治」という小冊子を作りました。これは1981年に出しているのですが、この頃には外

48）『地方における占領史関係文献目録』占領史研究会，1976.

49）中村隆英編『占領期日本の経済と政治』東京大学出版会，1979.8.

務省の文書公開が始まったものですから、地方の終戦連絡事務所の資料を調べたりしたものです。

80年代の研究会の活動ー会員の増加

そういうことでやっていたんですが、そのうちメンバーが増えてまいりました。80年代はずいぶんメンバーが増えてきます。若い人がどこかから聞きつけてやって来る。まあ「いらはい、いらはい」と受け入れました。それから、『思想の科学』のグループが共同研究を終えてこちらに合流する、というようなこともあったわけです。

それから、1980年に米国アマスト大学で占領関係の会議というのがございました。アマスト大学のレイ・ムーア（Ray Arvil Moore）という人が中心になってやったもので、1982年に出たレイ・ムーア編『天皇がバイブルを読んだ日』[50] は、この会議の記録の一部みたいなものであります。そこにかなり多くの日本人の学者が参加いたしまして、そこに出た人が日本に帰ってきて加入するというようなこともありました。たぶん中村政則（近現代史）さんとか教育史の久保義三さんが入ってきたのは、その会議以降のことじゃなかったかと思います。

特に教育関係の方は、国立教育研究所の佐藤秀夫さんなんかが中心になってやっていたのですかね、ずいぶんお入りになってきました。それこそ日教組講師団から文部省関係者まで、教育関係の方がたいへん増えてきたということでした。

また、占領史研究会で公開シンポジウムというのを1981年からやったので、それを機会にいろいろな人が入ってきたということであります。

代表を引き受ける

占領史研究会はそれまで竹前さんを中心にやっていたんですが、1982年の暮れから彼がイギリスに研究に行くということになったので、私が代表をやれということになりました。若造であったわけですが、自分より年配の方もいらっしゃいましたが、ほぼ3年間代表をやりました。私がおもに考えていたことは、『占領史研究会ニュース』をキチンと編集し発行するということで、50号から70号までを私がやりました。

いちばん最初の「第1号」は私の手書きです。もちろん、ワープロがない

50）レイ・ムーア編『天皇がバイブルを読んだ日』講談社, 1982.7.

時代です。その後、竹前さんが代表の時代にタイプの縦書きの形になりました。私が代表のときに横書きにしました。タイプは自分でやるわけじゃなくて、業者に出してお金を払って作ってもらっていたのです、今なら考えられない話ですけども。原稿を集めて、私は横浜国立大学に勤務していましたから、横浜国大の生協に頼んで何部か作ってもらって、それを郵送する、そういうかたちでやっていたわけです。今だったらパソコンで簡単に作れるでしょうし、郵送しなくてもメールで送ることもできるでしょうけれども、そういうことができなかった時代のものであります。

学際・民際・国際

当時、私は、研究会の特徴は「学際的であり、民際的であり、国際的である」と言っておりました。

政治、経済、労働、教育、国際関係、いろんな分野の人が集まってきました。このように学際的な研究者の集まる場になったのは、いろんな分野でこの時期についての関心が深まったということと関係があると思いますし、もうひとつは、英文の資料を使うようになったら、分野は違ってもノウハウというか、研究方法を知る必要がある。まず、どういうふうに検索をするのかなどが必要になる。次に、資料を読む際には、「JCS（統合参謀本部）ってなんだ？」とか「SWNCC（国務・陸軍・海軍三省調整委員会）ってなんだ？」とか、そういうようなことを知っていないとわけがわからないところもあるので、ここに来ればそれがわかるということもあったんじゃないかと思います。

民際的というのは、大学とかに所属している人じゃない方も入っていたということで、『思想の科学』のグループなどはそういう人が多かったわけです。ほかにも例えば、笹本征男さんという原爆のことをやっていた非常にユニークな人もいたわけですし、共同通信の記者をやっていた高橋紘さんは、彼が天皇の話をすると人が集まる、というようなことでした。研究会の最後の段階には佐藤一さんという、有名な下山事件の研究者で松川事件の元被告ですよね、彼なども来ていたというようなことで、いろんな方が交流できる場だったと思います。

そして国際的というのは、外国人の研究者がしょっちゅう研究会に出てきたり、『占領史研究会ニュース』に書いたりしていました。今思うと、やっぱりこの時期は、アメリカのマッカーサー記念館も1975年から始まったということでありますけども、アメリカでも研究が始まった。そういう意味で

は、研究会が最前線をずっと行っていたのだと思うんですね。ちょうどアメリカの資料（公文書）もこの頃から開き始めるわけですから。そうすると彼らにとってみても日本の学者と連携を取ることは非常にメリットがある、日本の情報が集まるわけですから。我々日本人研究者にとっても、外国でどういう研究をやっているのかということを知ることがメリットになる。ある意味で非常にハッピーな時代だったのではないかというふうに思います。海外のいろんな学者も研究会に関わってくれました。ジョン・ダワー（John W Dower, 歴史学者）も来ましたし、彼のお弟子さんで今はノースウェスタン大学の先生になっているローラ・ハイン（Laura Hein）も大学院生で来ていました。あとロジャー・ディングマン（Roger Dingman）だとか、イギリスのロジャー・バックレー（Roger Buckley）だとか、教育のハリー・レイ（Harry Wray）も来ましたし、変わったところではインドのアニル・ラワット（Anil Rawat）なんかがよく出てきました。報告はしませんでしたけれども元外交官のリチャード・フィン（Richard Finn）さんもよく来ていました。

それから、会員の親睦会みたいなこともよくやっていました。これは研究会としてではありませんけれども、占領関係の人が来日して国際文化会館に泊まったら、ちょっと何人かに「ごはんでも一緒に食べましょう」と声をかけて、エレノア・ハドレー（Eleanor Hadley 経済学者）さんだとかジャスティン・ウィリアムズ（Justin Williams, Sr. 民政局国会・政治課長等）だとかチャールズ・ケーディス（Charles Kades 民政局次長等）だとか、そういう方たちとの交流会をやりました。ほかにも厚木飛行場に行ったり、マッカーサーが執務していた日比谷の第一生命ビルの部屋を見に行ったり、横浜のホテル・ニュー・グランドに行ったりとか、そんなこともやっていました。

終焉

そういうこともやっていたんですが、しかし、20年もやっているとだんだんマンネリと言いますか、ちょっと活動が鈍くなってきたので、1992年に解散することになったわけであります。会員間にはいわゆる師弟関係があるわけじゃなく、みんなフラットで集まってやっているので、大先生もいらっしゃるし若い人もいるけれども自由にやるということだったわけです。ところが、「大先生がいる学会みたいになっちゃたね」とか、あるいは「世代の違いがはっきりしてきたよ」とかそういうような声も聞くようになって、それでは解散をしようということになったわけです。

その翌年に、ありがたいことに、これは古川純（憲法学者）さんが中心になってだと思いますが、柏書房が『占領史研究会ニュース』を復刻出版してくださいました。私もいちおうバック・ナンバーを全部とっておいたのですが、今はオリジナルのものはどこかにいって、こちらの復刻版が残っているという状況です。

占領史研究会の意義

じゃあ、この研究会はどういう意味があったのかということでありますが、研究会として共同研究として何かをやったという、そういう成果はありません。あえてあげれば、袖井さんと竹前さんの編で1992年に出ている、『戦後日本の原点：占領史の現在』[51]があります。これは対談集ですが、おもに研究会の人が中心になって行った対談です。研究会以外の人も参加してくださっていますが、かなりの部分を研究会メンバーでやりました。

確かに、共同研究をやれたわけではないのですが、いろんな研究をしている人たちが情報を交換し交流する場になっていたことは、意味はあったのかなと思っております。特に今のようにインターネットもなくメールもない時代に、『占領史研究会ニュース』を出して国内あるいは外国の情報を流すことは、研究者にとってそれなりに意味があったのだろうと思います。

雑駁なお話でしたが、これで終わらせていただきます。ありがとうございました。

（あまかわ あきら　横浜国立大学名誉教授）

51）袖井林二郎・竹前栄治 編『戦後日本の原点』（上・下）悠思社，1992.10.

「1970年前後の占領史研究
とその周辺」　天川 晃 氏

「プランゲ・ネットワーク」
巽 由佳子 氏

「プランゲ・ネットワーク」研究会風景